



大会輸送の実績（概要）

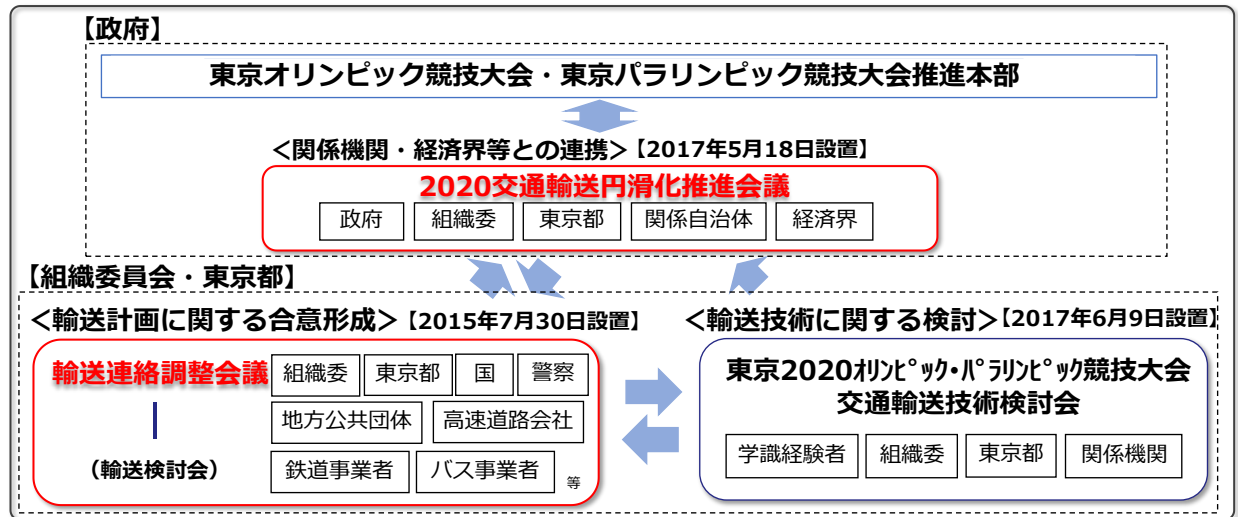
目次

1	輸送の体制 -----	p.2
2	入出国の状況と対応 -----	p.3
3	輸送サービス（バス） -----	p.5
4	輸送サービス（フリート） -----	p.6
5	アクセシビリティに配慮した輸送サービス -----	p.7
6	輸送広報の実績 -----	p.10
7	輸送運営上の新型コロナウイルス対策と影響 -----	p.11
8	地方会場における輸送の取組 -----	p.13
参考	輸送オペレーションにおける改善や評価など -----	p.15

1. 輸送の体制

【関係機関との連携】

- 大会の準備段階より、多くの関係機関等との推進体制を構築
- 輸送連絡調整会議は、東京圏のみならず、各道県についても立ち上げ輸送方針の策定をはじめ、輸送のオペレーションを構築・実施



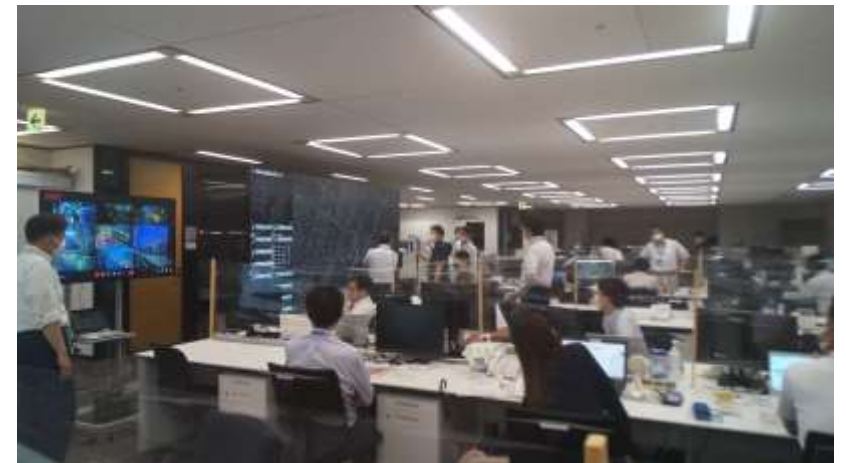
輸送の推進体制

【輸送センター(TROC)】

- 7月1日に輸送の司令塔となるTROCを稼働させ、大会期間中24時間体制で対応。警察や高速道路会社、日本道路交通情報センター等のリエゾンと連携を図り、交通の状況等をリアルタイムで把握することで、迅速かつ適切に様々な事象に対応。

(リエゾン派遣受入)

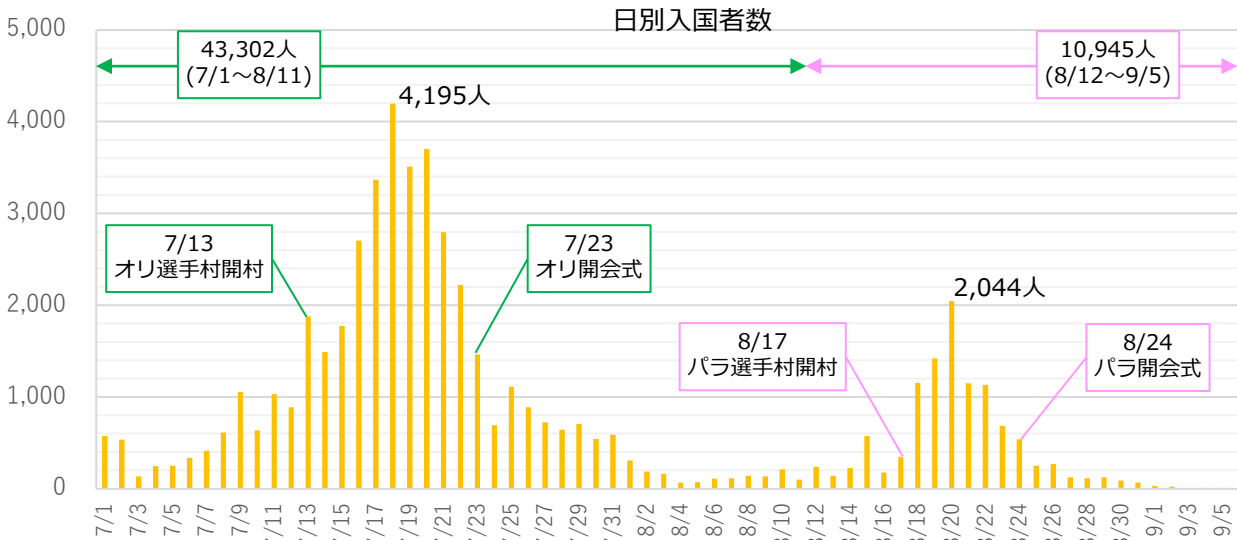
人数：延べ約950人 期間：7月8日～9月8日



TROC

2. 入出国の状況と対応

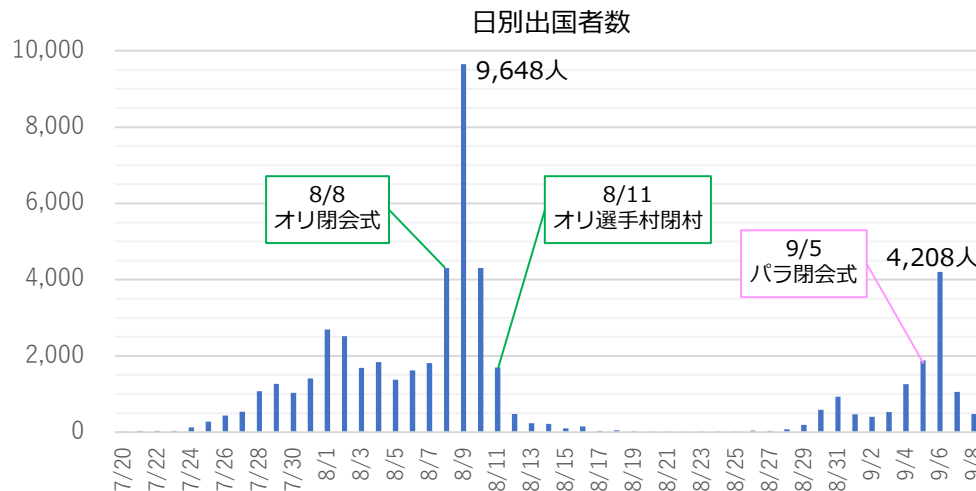
- 大会時入国者数は、オリ:約4.3万人、パラ:約1.1万人。開会式の4~5日前が最大のピーク
- 入国のピークは、オリ:7月18日の約4,200人、パラ:8月20日の約2,000人
- 出国のピークは、オリ:8月9日の約9,600人、パラ:9月6日の約4,200人



【入国】

- オリの入国者は43,302人、パラの入国者は10,945人
- オリ・パラともに開会式の4~5日前が最大のピーク
- オリの最大ピークは7月18日の4,195人
- パラの最大ピークは8月20日の2,044人

(出典：政府データ)



【出国】

- オリ・パラともに閉会式の翌日が最大のピーク
- オリの最大ピークは8月9日の9,648人
- パラの最大ピークは9月6日の4,208人

(出典：組織委員会ADSデータ)

2. 入出国の状況と対応

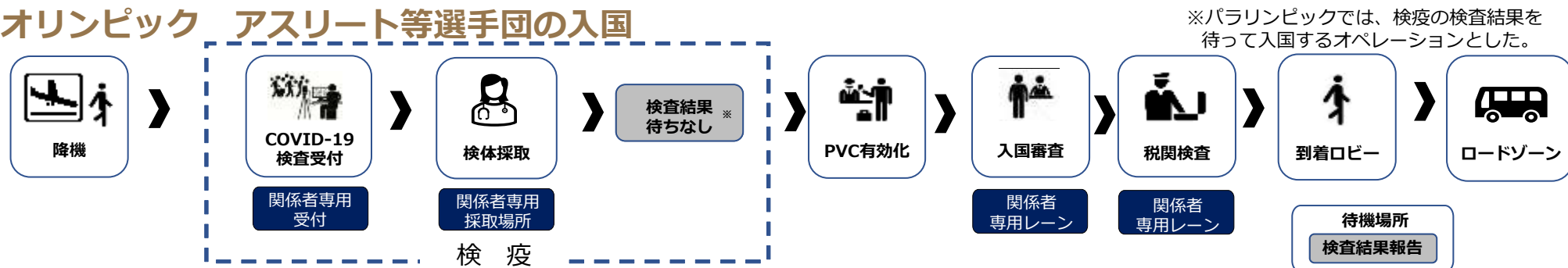
【入国時の対応】

- 入国審査、税関検査の前に、新型コロナウイルスの検査を受検
- 検査前には、本邦活動計画書の政府承認、出国前の陰性証明等を確認
- 大会関係者を他の入国者と交わらせないよう、動線の分離やスタッフによる誘導するとともに、オリンピックピーク時※には、選手に対して、検体採取後、入国手続きを実施し、検査結果を別途用意した待機場所で通知する円滑なオペレーションを実施

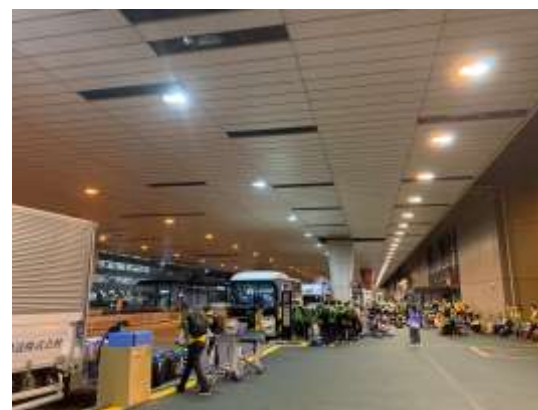
【入国後の輸送】

- 通常の入国時の輸送に加え、新型コロナウイルス検査で陽性になった選手等については、組織委員会が用意した陰圧仕様のフリードで選手村の発熱外来へ輸送
- 機内で陽性者に濃厚接触したおそれのある選手等も、選手村行TAバスとは別の車両で、別途用意した施設等へ輸送

オリンピック アスリート等選手団の入国



オリンピック時の入国状況（羽田空港）



パラリンピック時の入国状況
（成田空港のロードゾーン）

3. 輸送サービス（バス）

- 選手輸送サービスであるTA*バス等では、練習時間の確保等のためバスダイヤへの変更要求が多く出されたが、予備車（アクセシブルフリート含む）の活用等により臨機応変に対応
- メディア輸送サービスであるTM*バスによる輸送は、混雑するルートや時間帯に関する情報を収集した上で、順次、予備車の投入や運行間隔の短縮などを図り、サービスレベルを維持・向上
- 有観客の競技会場（宮城、伊豆・富士）では、事前予約制での観客シャトルバスを運行

*TA=Athletes/NOC・NPC Transport system , TM=Media Transport system



車両基地となった築地デポ



選手村におけるTAバス乗降場



競技会場の観客シャトルバス乗降場

TA及びTM輸送のサービス提供期間		
	オリンピック	パラリンピック
TA	7/13 ~ 8/11	8/17 ~ 9/8
TM	7/ 9 ~ 8/11	8/19 ~ 9/7

大会関係者バスの輸送実績（ピーク日・速報値）		
	運行台数	乗務員数
オリ(7/28)	2,160台	2,250人
パラ(8/28)	920台（※）	1,130人

※920台のうちアクセシブル車両は、リフト付き260台、低床70台 TOKYO 2020

4. 輸送サービス（フリート）

○組織委員会は2,654台のフリート（うち、アクセシブル車両150台）で輸送サービスを提供

○フリートによる輸送は、ステークホルダーのニーズ（需要）と車両数の情報を集約し、需要動向に応じた配車となるよう運用

（主な運用状況）

- OF又はPFが利用する輸送サービスのうち、T1、T2サービスについては、ニーズの把握に努め、T-TOSS*を活用した円滑な輸送サービスを提供
- NOC、NPCへの割当車両についても、大会当初は、メール、電話、輸送デスクでの予約に加え、T-TOSSも活用した輸送サービスを提供
- T3サービスについては、ボランティア及びプロのドライバーを確保するとともに、T-TOSS*による需要の把握と配車を実施し、効率的な運用を実施
- IFやマーケティングパートナー(MP)に対してもフリートによる輸送サービスを提供するとともに、選手村から遠距離にある霞が関カンツリー倶楽部までフリートによる選手輸送サービス(TA Golf)を提供

*東京大会で初めて採用したITシステム（T-TOSS=Toyota -Transport Operation Support System）



使用実績	オリンピック		パラリンピック	
	期間	使用台数	期間	使用台数
T1/T2	7/22 - 8/11	635	8/23 - 9/6	340
T3	7/ 7 - 8/11	600	8/15 - 9/8	425
TA Golf	7/24 - 8/ 8	96	-	-
NOC/NPC	7/ 7 - 8/11	654	8/15 - 9/8	395
IF	7/13 - 8/11	88	8/14 - 9/8	22
MP	7/16 - 8/11	78	8/17 - 9/8	58

※これらの他、組織委員会のFAやOBS等に割り当てた車両がある

5. アクセシビリティに配慮した輸送サービス (TMa、T3アクセシブル、TAa)

TMa (TM accessible fleet)

TMバスに乗りすることが困難な車いす使用のメディアに対して、事前予約制のアクセシブルフリートによる輸送サービス【TMaサービス】を提供。乗降場はTMとの近傍を基本としつつ、乗降場からベニューメディアセンター（VMC）まで動線等のアクセシビリティの確保が困難な一部の会場では、T3アクセシブルと乗降場を共用



TMaとT3アクセシブルとの乗降場の共用例

T3 アクセシブル (T3ユーザー向けアクセシブルサービス)

車いす使用などアクセシビリティへの配慮が必要なT3ユーザーを対象とした事前予約制の輸送サービス。通常のT3乗降場よりもPFラウンジの近く（セキュア内）にT3アクセシブル乗降場を設置。乗降場からPFラウンジまでは、アクセシブルな動線を確保



TAa (TA accessible fleet)

選手/NPC輸送サービスにおいて、一時的な需要増により、定期運行のシャトルバスに乗り切れない場合に、予備車のバスに加え、TAモール内に配備したTAa（アクセシブルフリート）により、柔軟な輸送サービスを提供



TAa待機場場(TAモール内)

5. アクセシビリティに配慮した輸送サービス (パラリンピック大会時の車両タイプ)

バス

選手輸送には、各競技の特性や輸送ニーズ、輸送ルート等の状況に応じて、観光バスタイプ（コーチバス、リフト付きコーチバス）、路線バスタイプ（低床バス）、ミニバスタイプ（リフト付きマイクロバス）を活用



観光バスタイプ（リフト付き）
バス付属のリフトで車いすのまま乗降可能



路線バスタイプ（低床バス）
バス付属のスロープ板で車いすのまま乗降可能



観光バスタイプ（コーチバス）

フリート、アクセシブルフリート

通常のフリート車両に加え、車いすの大会関係者の輸送には、車載のスロープ板で車いすのまま後部ドアからの乗車と、電動で車外にスライドダウンする座席へ車いすから移る形での乗車、両方の機能を備えた、東京大会のために開発された新しいタイプのアクセシブル車両を活用



5. アクセシビリティに配慮した輸送サービス (リフト付きバス乗降用スロープ)

パラリンピック大会時には、車いす選手等の移動時のアクセシビリティを確保するため、晴海選手村及び一部の競技会場の乗降場に、リフト付きバス用の乗降用スロープを計10基設置



6. 輸送広報の実績

- ・市民・企業等に対し、大会時の交通対策や、交通需要の抑制等について、広く協力を得るため、ウェブ、チラシ・ポスター、横断幕・看板、テレビ、ラジオ、道路交通情報板等の各種媒体を活用した広報を展開
- ・実施に当たっては、関係機関が保有する広報媒体や窓口等での掲出にご協力いただくことで、広範囲かつ多方面での広報を展開



TDMのバナー広告（内閣官房）



TDMのポスター（東京都）



TSMのポスター
（組織委員会）



料金施策のポスター
（首都高速道路）

【大会期間中(7/19~9/5)における問い合わせ実績】

組織委員会	2,598件	（うち、会場周辺交通対策 58%、TSM 29%、料金施策 4%、その他 9%）		
東京都	1,506件	（うち、交通対策 約71%、東京2020大会について 約12%、大会関係車両 約3%、その他 約15%）		
日本道路交通情報センター	33,712件	（うち、道路交通状況 85%、経路案内 4%、交通予測 2%、料金 1%、その他 8%）		
首都高速道路	約22,200件	東日本高速道路	約5,500件	（8/10~23を除く）
		中日本高速道路	約800件	

7. 輸送にあたってのコロナ対策

大会関係車両における新型コロナウイルスの感染症対策として、以下を実施

【大会関係車両の対策】

- ・フリートについては、運転席と後席との間にパーティションを設置するとともに、車内の換気、消毒等を徹底
- ・バスについては、運転席の後席を不使用とし、フリートと同様、車内の換気や消毒等を徹底

【バスの増便等による対応】

- ・バス車内のフィジカル・ディスタンスの確保が課題であったことから、混雑するルートや時間帯に関する情報を収集した上で、順次、予備車を投入し、バスの輸送力を増強
- ・メディアが宿泊するホテルについて、複数のホテルに対し1か所設けていたミーティングポイント（TMバス乗降場）を、ホテルの敷地内又はその隣接地に再設定。これに伴い、TMバスホテル便のルート数（東京圏）が当初の37ルートから57ルートと、20ルート増加したが、バスの増車により対応
- ・選手村のTAモールにおいては、練習期間の短縮に伴い、練習会場行きのバスの需要が当初の想定を超えるようなこともあったが、増便等により対応



フリート車内に設置したパーティション



TMバスに掲示した乗車定員30人のマーク



MTM（メディアトランスポートモール）とMPC間の巡回バスでも需要が大きい時間帯に運行間隔を10分から5分に短縮・増便し、輸送力を増強することで、乗車するメディア関係者のフィジカル・ディスタンスを確保

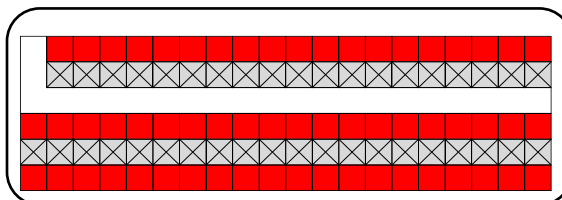
7. 輸送にあたってのコロナ対策

【都市間輸送における対策】

- ・ 札幌や仙台への移動にあたっては、東京2020大会新型コロナウイルス感染症対策調整会議で検討された変異株等に対応した追加的な対策として、全ての移動手段は貸切（新幹線の一両借り、ハイヤーなど）に限り、航空機の利用がやむを得ない場合は他の乗客との接触を厳に回避した輸送を実施
- ・ 伊豆・富士へは専用バスによる都市間輸送を実施



新幹線での移動にあたっては、駅構内に警備員を配置し、選手団と一般利用者の動線を分離



新幹線（一両借り）の配席イメージ
（赤色の座席を着席可能として、
フィジカル・ディスタンスを確保）

【公共交通に代わる輸送サービスの提供】

- ・ 国の防疫措置により、入国後14日間、公共交通を使用することができない大会関係者を輸送するため、タクシー車両をハイヤー車両に臨時的に流用する国の特例制度を活用した輸送サービス（TCT*サービス）を提供

*TCT=Transport by Chartered Taxi



TCT サービスユーザーズガイド
2021年7月9日～9月6日（第2期）

TCTサービスとは
日本の防疫措置として海外から来日する関係者が入国後14日間公共交通（一般のタクシーを含む）を利用できないことから、代替の輸送として、特別に調達した専用のハイヤーを運用する大会専用の輸送サービスです。

サービス対象期間	2021年7月9日(金)～9月6日(水)
サービス提供時間	24時間
対象利用者	入国後14日以内の大会関係者 15日回以降はTPカードにより公共交通機関をご利用ください（選手等、要は除く）。
移動可能区域	<ul style="list-style-type: none"> ・ Tokyo 2020組織委員会により定められた区域を片道で移動します。 ・ TF,FMバスが通っているルートについては、原則として、当該バスのご利用を優先してください。 ・ 当ユーザーズガイドのサービス対象地域は、一部に限ります。

※本ガイド記載の利用ルールを遵守して下さい。
やむを得ずキャンセルする場合は、予約したタクシー会社に必ず連絡して下さい。なお、キャンセルはご自身でお願いください。

8. 地方会場における輸送の取組

1) 北海道

マラソン・競歩に伴う交通規制の実施期間中、一部路線で混雑が見られたものの、全体的には、う回道路への交通転換がされるなど、大会期間を通じて、札幌市内では大規模な交通混雑はなく、安全かつ円滑な大会輸送を実現した。

2) 宮城県

- ・宮城県、宮城県警、宮城県渋滞対策連絡協議会等と連携し、会場周辺の交通規制等を行うとともに、広報チラシの配布や道路情報板によるTDMの取り組みや広域的なう回案内を行った。その結果、仙台市内中心部や利府町内の会場周辺等、輸送ルートやバス乗降場において円滑な輸送が実現できた。
- ・また、観客輸送に関しては、数少ない有観客の会場となったが、コロナ対策に万全を期し、観客を安全・円滑に輸送することができた。

3) 福島県

- ・関係者輸送ルートについては、国・福島県・福島市と連携して、市内全域や商工会議所に広報チラシを配布するなどTDMの取り組みを行い、円滑な大会輸送を実現した。
- ・また、会場周辺及び福島駅周辺については、定時性の確保のため、福島県警と連携し、交通対策等を実施したため、混乱なく、円滑かつ安全な輸送が実現できた。

8. 地方会場における輸送の取組

4) 茨城県

輸送ルート及び鹿嶋市内においては、臨海部の工業地帯を中心にTDMへの協力依頼及び県警と連携した会場周辺交通対策を行った効果もあり、大会期間中を通して大きな渋滞は生じなかった。そのため、選手バス等大会関係者車両については、遅延することなく、定時性を確保した円滑な輸送を行うことができた。

5) 神奈川県

- ・国道134号の沿線自治体等に混雑緩和を呼びかける広報チラシの配布や道路看板等の広報の取組により、輸送ルートの混雑が緩和され、選手や大会関係者等を時間どおり円滑に輸送することができた。
- ・また、江の島会場周辺における交通規制をはじめとした各種対策の実施にあたっては、警察や関係機関と連携し、混乱なく、安全・円滑な輸送を行った。

6) 静岡県

- ・伊豆スカイラインの無料化による交通の転換、関東方面を中心に混雑緩和を呼びかける広域的な広報の取組により、輸送ルートの混雑が緩和され、選手や大会関係者等を時間どおり円滑に輸送することができた。
- ・観客シャトルバス利用駅周辺の交通規制により歩行者動線を確保するとともに、地域住民や企業の協力を得て駅周辺の混雑緩和に努め、観客を安全・円滑に輸送することができた。

【参考（輸送オペレーションにおける改善や評価など）】

【臨機応変な輸送オペレーション（事例）】

・会場輸送スタッフが臨機応変な対応で組織委員会が提供するTCTサービスを活用したことにより、行先を間違えたジャマイカ選手が競技に間に合い、陸上競技で金メダルを獲得

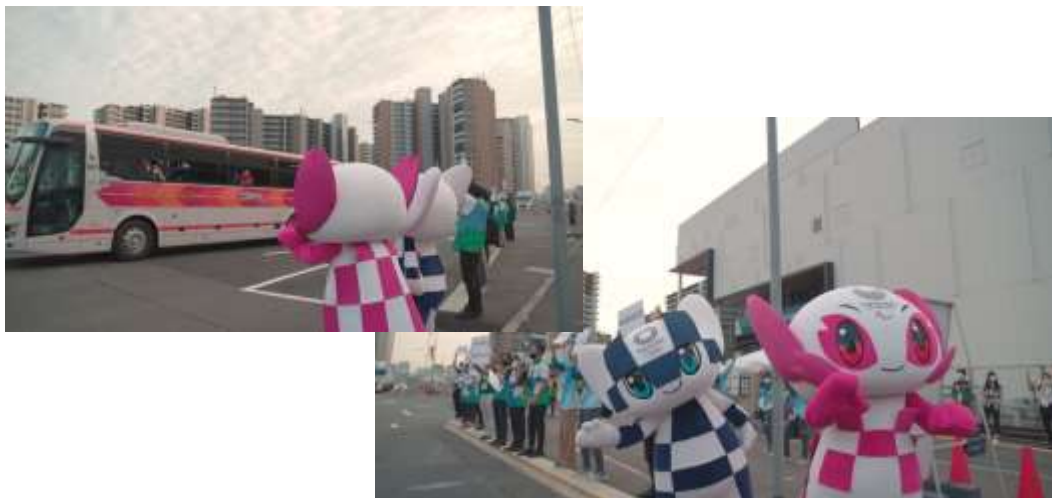


・会場オペレーションの改善に対するIGF（国際ゴルフ連盟）からの感謝状（右図）

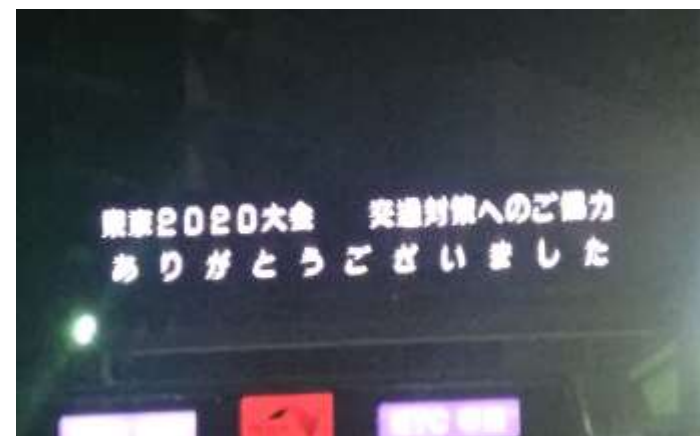
・8月6日の女子サッカーの試合について、前日に横浜国際総合競技場に会場を変更。これに伴う大会関係車両の運行の変更や会場周辺における案内誘導について、関係機関・事業者の連携・協力により、円滑な輸送を実現



【おもてなし・感謝の取組（事例）】



ミライトワ・ソメイティの出国バス見送り



交通マネジメントに協力いただいた道路利用者向けの感謝メッセージ